

第1章

「はじめに」の書き方について

平成
社史

まず、社史を執筆するに際して、社史をまとめようと考えた思いから綴ってまいりましょう。

この社史を読まれる方は、書き手がどのような思いで、社史をまとめようと考えられたのか、何を伝えたいと思われたのか、そのような「思い」を知ることで、社史の読み方は変わってきます。

下記のご質問に答えていただくように、原稿を執筆してください。

主な質問は、歴史話を聞くものではなく、歴史を残そうと思うその理由についてお尋ねしています。何のために、誰のために『社史』を残そうと思われたのか、ということです。

歴史と向き合うのは、とても勇気のいることです。だからこそ、歴史を書こうとしている今、その重要性と、伝えようとしている相手について、考えておくことが必要です。それこそが、書き手が歴史を記していく勇気のもとになり、時には、現実の歴史を前にひるんで、筆が止まったときに、前に進めてくれる原動力になるからです。

いま、社史というオリジナルな本を作ることができなくても、10年後を見込んで、いま、綴れることを、書き残しておくことは、後の人達へ最高の贈り物になります。

書きにくいことでも、書いてしまえば、客観的に見ることができます。そして、この社史にとって、それができるのは、恐らく貴方だけではないでしょうか。この『平成社史』との出会いは、組織が歴史を残してほしい、という思いの結実でもあると考えられます。

下記の質問に答えることで、「はじめに」のポイントを記すことができます。

世界でたった1冊の社史を求めて、貴社の歴史への旅を楽しんで下さい。

Q1：『社史』という自社の歴史をまとめる本がある、ということを知ったのはいつの頃に、何がきっかけでしたか？

Q2：『社史』と聞いたときに、どのような印象を持っていましたか？ いままで聞いたり、見たりした『社史』の印象も書いて下さい。

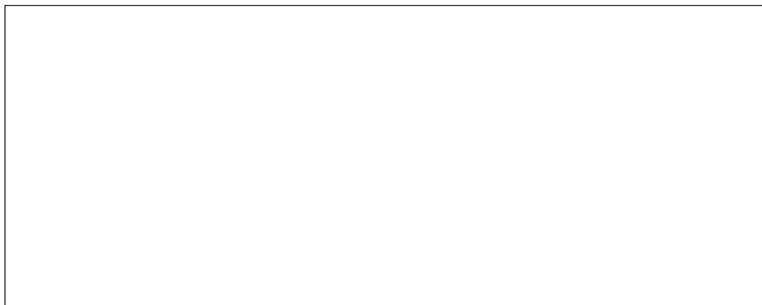
Q3：貴方自身が「社史をまとめよう」と考えられたのは、なぜですか？



Q4：社史を読まれる中心の読者層は誰ですか？ それはなぜですか？



Q5：中心読者以外に、どのような読者を考えていますか？ それはなぜですか？



Q6：この『社史』を通じて、もっとも伝えたいこと、語りた
いことは何ですか？ それはなぜですか？

Q7：もっとも伝えたいことの次に伝えたいことは何ですか？
それはなぜですか？

Q8：この社史を読んだ読者に、何を学んでもらい、次の世代
に何を伝えてほしいと思いますか？

Q9：自社の歴史をまとめるのは、簡単ではありません。その高いハードルを乗り越えていく心構えを教えてください。